

おおさか発・プラスアルファ

ニュースUP

毎日新聞や財団法人大阪国際児童文学館などは、東日本大震災で被災した子供たちに本を贈る「いっしょだよ」キャンペーンを展開している。既に2回にわたり学校や保育園などに配布しており、今後も続ける予定だ。8月2冊を宮城、福島両県に届けた9月15日の第1次配布の様子を通じて見えた「本の力」とは――。

学芸部
反橋希美

■仮設カフェに本棚

「なーに、ぬねーの」。配本先の一つ、宮城県亘理町のコミュニティカフェ「亘理」の入り口で、文学館の主任専門員、土居安子さん(46)が読者カードを渡していた。言葉遊び絵本が、きゅん(2)、(3)谷川俊太郎作、堀内誠一絵、なむん出版)を渡して、自分の顔を、母親の膝で見つめる子供。この言葉の黒板に、まな(50)が「いっしょだよ」で、すねと書いて見守っていた。

被災地に本を贈るといふこと

「被災者を支え、住居と支障の改善を図りたい」と5月、支援金や物資が、被災者に無料、一般には5000円で家族料理を出すカフェを町の集会所に開いた。7月にフレシア小館に移転したが、今や1日70〜80人が訪れる、地域のきわみの地帯だ。

内の仮設住宅集会所にも声をかけ「いっしょだよ」キャンペーンなどで、本のある場所を整えようとしていた。

■音すら気を使って
「夕食が終わると部屋にきて、音……心にほかたのなしかぶさる感じが気になっていまして」。第1次配本先の16カ所から、私たちがいちご(ご)を訪問先を決めたのは、馬場さん(この間、こと

心の「穴」 ゆっくり繕う



「いっしょだよ」キャンペーンで届けた絵本を子供たちに見せる土居安子・大阪国際児童文学館主任専門員(右端)＝宮城県亘理町の亘理いちごっこで9月15日、丸山博撮影

なりのりをメールでかわし
ていたからだ。
「いっしょだよ」の正体は
？ 他の娘も多々ある中、
なぜ「本」なのか？ 疑問を
ぶつけると馬場さんはあま
り子(ご)を話してくれた。
カフェを始めて間もなく、
頃、仮設住宅から来た若い
娘は、走り回る手を「ご」に
座ってなさい」と叱りつけ
ていた。「避難所でも、仮設
に入っても」大きな声を出
せてはひびき「ご」として
しきたらだの」と考えた
馬場さんが「聞いてますよ、
他の人に本を渡さずかか
時だけみんな住居(まじょ
う)と声をかけて、母親
は涙(なみだ)かたむく。

■「阪神」の経験

一方、本の渡し手の土居
さんは阪神大震災の時、兵庫県
西宮市の自宅に水もガスも復
旧して5年頃か、他のホ
ランティヤを避難所で読書
かせを始めた。

当初「不安が子供たちか
らにじみ出た」。長い話
では集中力が続かない。布面
が並ぶ生活の場で読書、
大人に叱られる場面もあっ
た。避難所に「笑いたくても
笑えない雰囲気がある」と感
じた土居さんたちは「キャ
ンペンの」(最新本作「文研

年、子供の本に開くこと
土居さんの思いだ。

■子供の笑顔のため

再び今年9月15日亘理
「ご」(ご)「まじょまじょ」
ごかな」。キャンペーン
で届けた50冊から、長女直美
ちゃん(1)と動いた山田慶子
さん(33)は「まじょまじょ
た(五珠太郎作、福音館書店)
を届けた。慶子さんは「車も
流されたので、絵本を届いた
も嬉しかった」とほほえんだ。
馬場さんは「いっしょだよ」
に来れば、あの本を会える
となればいっしょと親子
を見つめた。読書を通じて
土居さん(ご)の時業(じしや)
くれるだけで十分と言った。
本を通じて寄り添い支えた
い。私たちがほんの気持
ちを込め、キャンペーンを
し「まじょ」を届けた。専
付金が日々土積(つみ)きさへ
一方、田嶋的(たじま)の
本が本(ほん)に役立つのかとい
う気持ちもなかったわけでは
ない。だが馬場さん、土居
さんの思いに接し、現地の親子
の笑顔に触れる。本との
出会いが親子の心の隙(ひま)
になり、心(こころ)と笑顔(えがお)で
国(くに)国(くに)図(ず)書(しょ)館(かん)で
、これまでにも日本大震災
の被災地に子供の本を贈る運
動を始めたのは団体、個人、
企業など多岐(たき)にわたる。毎日新
聞など数団体しかなかった阪
神大震災時(とき)には、被災(ひさい)後(ご)、
福島(ふくしま)県(けん)山(やま)形(かた)市(し)では被災(ひさい)後(ご)、
こどもの心のケアプロジェクト
ト」が始まり、本の読聞(よみ
せが大きな柱(はしら)になってい
私(わたし)たちのキャンペーンだけ
なく他(ほか)団(だん)体(たい)の運動(うご)も含(こ)め
て「被災(ひさい)地(ち)にお(お)ける本(ほん)の力(ちから)」を
注(しゆ)視(し)していき

出版(しゅつぱん)なコンセンサスを
積極的に築(きず)いた。子供たち
笑(わら)う場面(ばん)を待(まち)ってス
クに笑(わら)った。マークをめぐ
前(まへ)が笑い出すも、
時間(じかん)がたつと、少しづつ長
い顔(かほ)も開(ひら)けるようになった。
「心に傷(きず)を負(お)った手の癒(な)り
になるかもしれない」と生死(せいじ)
をテーマにした「1000回
生(な)きたね」(佐野洋(よ)作、
講談社)を読(よ)んだ時は、しほ
ら「静(しず)美(み)のかん(かん)さ(さ)い(い)。
「すく」何(なに)かにはじま
らなかつたけれど、でも癒
れた子供の本(ほん)は、生(な)ま
る意味(いみ)や一人(ひとり)一人(ひとり)に価値(たか)がある
ことを教えてくれた」。

「ニュースUP」は毎週水曜日掲載です。ご意見、ご感想は〒530-8251 毎日新聞「プラスα」部 ニュースUP係。郵便、ファクス(06-6346-8104)、メール(o.talk-news@mainichi.co.jp)へ。